

金毘羅參詣名所圖會 五

ル 4  
236  
5



門 居  
236  
卷 5

金毘羅

若山  
書林

金毘羅參詣名所圖會卷之五

目錄

- 安益川
- 城山の神社
- 菅公祈雨之古蹟
- 洞林院本堂
- 善女龍王祠
- 金堂 鐘樓
- 六條利官為義塔
- 相模坊の社
- 頓燈寺形の燈籠
- 靴ヶ岡
- 松山の館之古趾
- 延喜地藏
- 千躰堂
- 蔵王権現社
- 十王堂
- 鎮西八郎為朝塔
- 御供所
- 勅額門
- 甲智の御所之古趾
- 寶幢菴
- 鴨の神社
- 高屋天皇の社
- 諸神勸請塚
- 行者堂
- 鎮守辨天祠
- 御廟靈殿
- 時忠祈願之塔
- 同額面之圖
- 神谷の神社
- 白峯山
- 大師堂
- 馬ヶ嶽
- 崇徳天皇の陵
- 本地堂
- 西行腰掛石
- 玉章本

金毘羅

金毘羅

碧水藏書

本坊未院 <small>ほんぼうみえん</small>	池宮 <small>いけみや</small>	茶堂 <small>ちやどう</small>	網加井 <small>あみかゐ</small>	大門 <small>だいもん</small>	頼朝公之塔 <small>よりともこうのとう</small>
朝千鳥琵琶塚 <small>あさちづるびばづか</small>	兎ヶ嶽 <small>うさぎがたけ</small>	爲義爲朝之圖 <small>たけのりたけのちのず</small>	松ヶ浦 <small>まつがうら</small>	爲義爲朝之圖 <small>たけのりたけのちのず</small>	西行御廟 <small>さいぎやうごぼ</small>
頭氏神 <small>あたまうぢのかみ</small>	愛宕山 <small>あいだがやま</small>	松ヶ浦 <small>まつがうら</small>	松ヶ浦 <small>まつがうら</small>	松ヶ浦 <small>まつがうら</small>	松山の津 <small>まつやまのつ</small>
松ヶ浦の神社 <small>まつがうらのじんしゃ</small>	松樹石 <small>まつじゆせき</small>	松石 <small>まつせき</small>	松石 <small>まつせき</small>	松石 <small>まつせき</small>	網の浦 <small>あみのうら</small>
伯の磯 <small>はくのかい</small>	青海の浦 <small>あゐのうら</small>	天皇烟の宮 <small>てんかうえんのみや</small>	天皇烟の宮 <small>てんかうえんのみや</small>	吹雪谷 <small>ふきゆきや</small>	吹雪谷 <small>ふきゆきや</small>
乃生寄 <small>のよゑ</small>	乃生の坂 <small>のよゑのさか</small>	名産五加皮茶 <small>なさんごかひちや</small>	名産五加皮茶 <small>なさんごかひちや</small>	石蛤 <small>いしかか</small>	石蛤 <small>いしかか</small>
國分寺 <small>くわぶんじ</small>	金堂 <small>きんどう</small>	大塔 <small>だいとう</small>	大塔 <small>だいとう</small>	大師堂 <small>だいしどう</small>	大師堂 <small>だいしどう</small>
藥師堂 <small>やくしどう</small>	毘沙門堂 <small>びしゃもんどう</small>	鐘樓茶堂 <small>かねろうちやどう</small>	鐘樓茶堂 <small>かねろうちやどう</small>	蓮池 <small>れんぢ</small>	蓮池 <small>れんぢ</small>
靈樹の枯木 <small>れいじゆのかき</small>	二王門 <small>にわうもん</small>	小太郎 <small>せうたろう</small>	小太郎 <small>せうたろう</small>	国分八幡宮 <small>くわぶんはつぱんみや</small>	国分八幡宮 <small>くわぶんはつぱんみや</small>
吉水茶堂 <small>よしみづちやどう</small>	不動堂 <small>ふどうどう</small>	足尾明神祠 <small>あしおのあきのかみ</small>	足尾明神祠 <small>あしおのあきのかみ</small>	根香寺 <small>ねかうじ</small>	根香寺 <small>ねかうじ</small>
大師堂 <small>だいしどう</small>	本坊茶堂 <small>ほんぼうちやどう</small>	二王門 <small>にわうもん</small>	二王門 <small>にわうもん</small>	香西の浦 <small>かうさいのうら</small>	香西の浦 <small>かうさいのうら</small>

金五ノ目ノ一

郷東川 <small>きやうとうがは</small>	重仁親王古塚 <small>しげのちかみむすねのふか</small>	絃打山 <small>げんうちやま</small>	藥王寺 <small>やくわうじ</small>	遊系の濱 <small>ゆけいのなみ</small>	鷺田の古城 <small>さぎのたのふるき</small>	権現の社 <small>けんげんのかみ</small>
----------------------------	------------------------------------	---------------------------	--------------------------	----------------------------	-------------------------------	-----------------------------

あやがわ  
綾の川 安益の川阿野の川

又阿翁水綾水

とも書り河辺

加茂村と云ふ

はる故に俗に加茂

川と云ふ

あやの  
惣て此の安益郡

ふるを以て安益と云ふ

地名多し

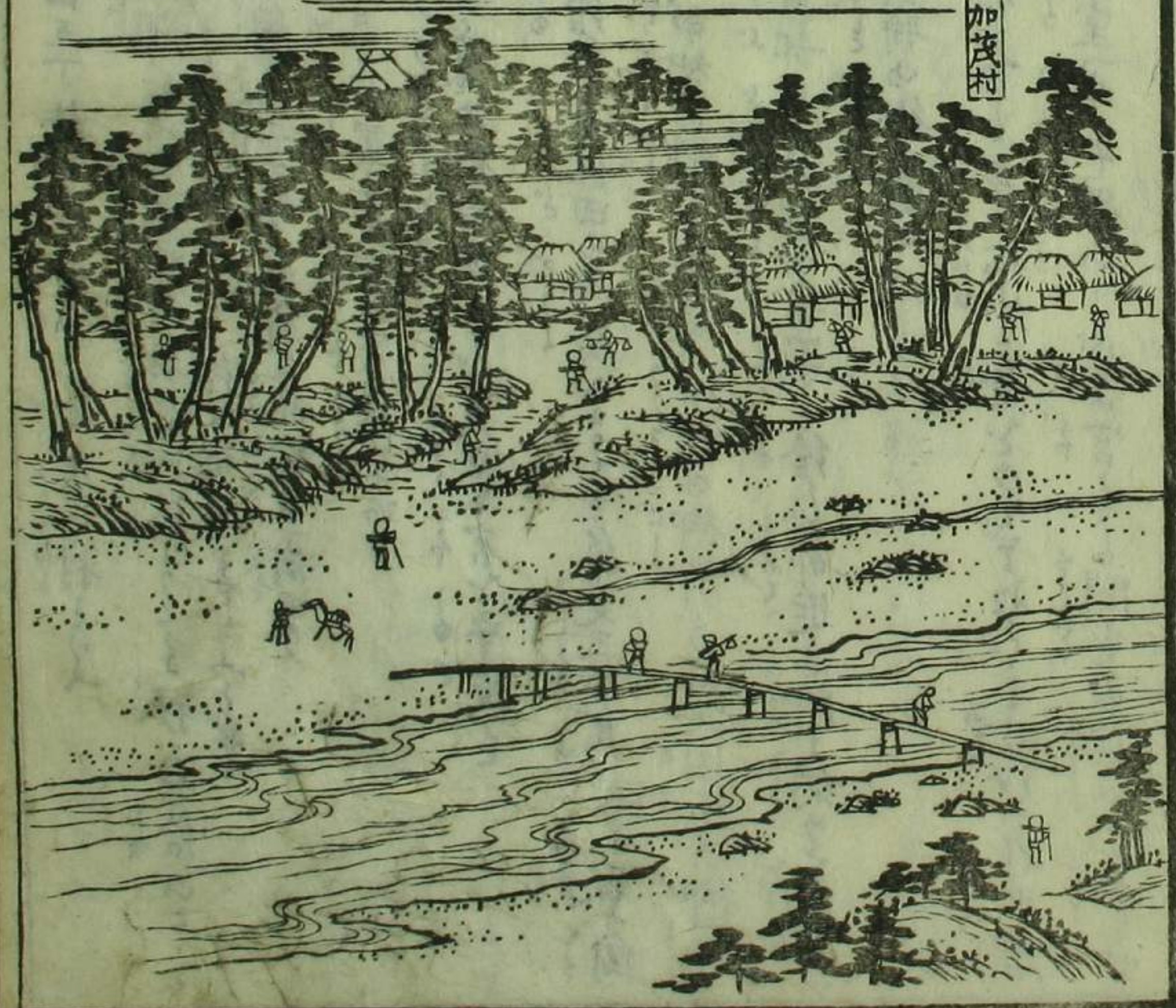
名寄

霧ふれぬ綾の川は

鳴る声なり

玄の乃方と云ふ

中宮内侍



鞍ヶ岡 安益川の西向ふ四五丁許にあり甲智の郷府中村とのみ

甲智之御所之古趾 鞍ヶ岡にあり崇徳天皇林田の御所より遷らせ給ひて

崇徳天皇宮 鞍ヶ岡の山上にあり社前ニ接橋の三樹あり

観音堂 十二面観世音を安置と天皇の宮の傍にあり

宝幢菴 観音堂に並ぶ菴主観音堂といひ天皇の宮と守役と

新院讚岐の国に遷らせ給ひて林田の御所より三年其後此鞍ヶ岡

の御所を造り移し奉る則甲智の郷なる故に甲智の御所といひ又国府の御所

とす此所はまた人間に五部の大乗経を書写し給ひ都迄と所を納むる思召

給ひて京師へ登りて其時の御製

濱千鳥の都へかへりて身ハ松山に音とのぞねくと遊ばれ平治

元年の春のち仁和寺の御室へ申せ給ひて五の宮より閑白の此由を申させ

金五ノ巻

給ふ殿下よりもまを申せ給へども主上つのみ御のれもなじて彼御経を則ち

返りつらる親院此由を聞き口惜と哀る我朝も限らば天竺震且も国

と論位と争ふ叔父甥謀殺を起し兄弟合戦を起し其の跡を都に

我此変を悔思ひ悪心懺悔の爲に此経を書奉る所なり然るに筆の跡を都に

おん程の儀は此経を魔道に回向し魔王とて遺恨を茲

せんと大乗経の奥に誓状とて千尋の底に沈め其後ハ御所も刻に御

髪をも剃せり此の御衣のまじり長頭巾と巻せり御姿をやつ悪念

を倍従り御神樂をいぬる見奉り入すの許の人をれば其も敷奉

るをさしめり大に情を人なりれば只一人自ら及とみけ都と出

遙に讚岐の国に下りて御所のまに余所を立廻り人々も目もあはれ

ぬ御ありとるなり如何もしく内又斯と申いとやと志し深く伺ひたれば守り  
 奉る武士はけくともめくれは空しく其日暮るる折は月も無りければ蓮如  
 心を清く笛を吹く終夜御所をめぐりたる不曉と黒くする水干袴着と  
 る人内より出る便をともめく相も内へ入るる不柴の御所のさむらひど  
 實よひせと御住居なり蓮如涙よひせひかろ有つる人しく斯と申入りし  
 ぶ院も思しと都の人る昔御後せしめられは稍く御前へもたれ  
 けい思しやうれど問をけいとも思ひ出ぬべし又斯る浅き見点と入ん  
 もけすくれは中くはなるとは只御涙とのを涙させまひ多彼男院は  
 御き如此との由と答くれは蓮如がもと一首の奇を縁どくは涙かんと  
 朝々やあぬぬふ入るる君もまらとせめて悲し  
 院御返歌あり

金五ノ二



朝倉やんづつと飯とちも  
 鉤とるの音とのをせり  
 蓮如がふふ思し是を後  
 入つて都へを飯り其後長  
 寛二年八月廿六日御年四十六  
 明とを給ふ萌御の後讚  
 岐院と申奉り治承元年  
 六月廿九日追号りて崇徳  
 院と申多近世行る  
 百人一首一話と又書ハ  
 保元物語おられるや国司  
 真島とつ所  
 御所を造りたれは

御座々々又志度の報が因らる所は住せ給へり中畧其後長寛二年八月九日  
 御奉四十六歳續岐の支度々々終り山明々々を終ひ多去又支度々々山寺  
 々々々々給ひても奉々々々成々々々れバト有是非なり  
 真島ハ圓龜の向ふの澳に於て筑島あり人住地に於ては是ハ直島の熱なる  
 所也然れども直島ハ前より如く一夜の舟がさし給ふあり御所と宮に  
 支度々々又志度々報が同々々々地々々志度々々寒川郡報が同々々阿野  
 の郡々々其隔々々奉々八里の余り原未志度々山寺もなごを々々海にの平  
 地々々故々支度々々終り朝々を給ふ々々に趾々々々々々々々々々又八月廿四日  
 前王廟陵記 宗徳院 紹運録曰長寛二年八月廿六日崩于讃岐  
 配所年四十六奉葬於白峯二

城山神社 府中村に於て安益川の岸より十丁許に於て菅公而て祈り給ひては神より

祭神 一座 神擲王 延喜式神名帳に出阿野郡三座之内なり

日本書紀曰景行天皇妃五十河媛生神擲皇子稻背入彦皇子其  
 兄神擲皇子是讚岐国造之始祖也ト云々

則神擲王ハ八皇十二代景行天皇第十七の王子なり景行廿八年讚岐  
 国山田郡の司となり下給ふ同郡屋島山に皇居凡国氏これと君也王親と  
 守るを承けいよく繁榮し王子の子孫國中に連綿伝はると云

仁和二年正月菅公相道實四十二歳小く讚岐守に任ぜると同の四月  
 讚岐國々々下々給ひ滝の台村に官府ありを任せ給ふ是より同の夏に於て  
 雨ふりて此國々々夏之初より旱々々一雨の潤り給ふれば河池中の水も  
 田畑ハ勿論諸々の草木も悉く枝葉となを畧民ハ淋々々々舟とて到る冬熟

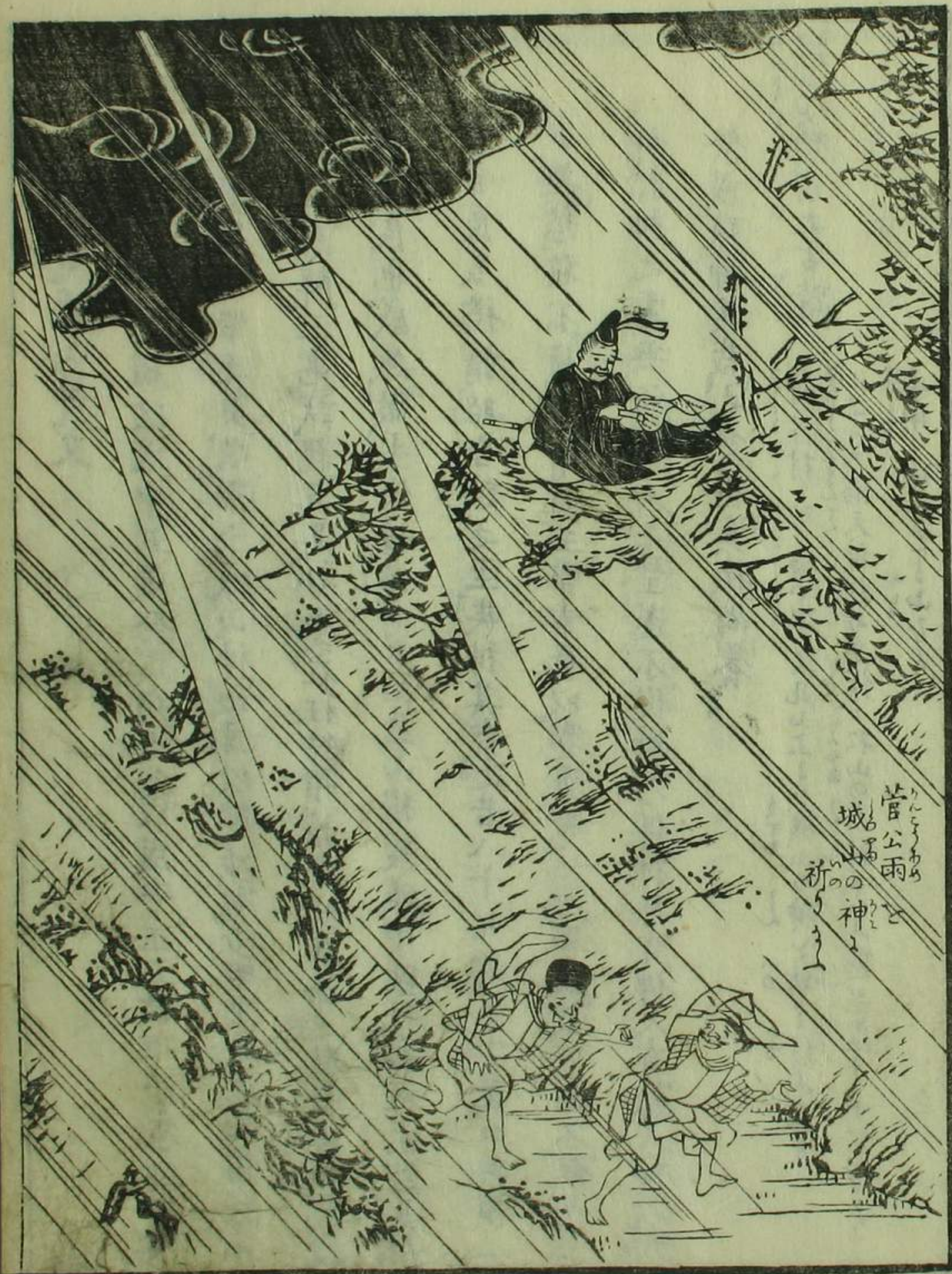
かひくらくとく床は通行の人もく避迄の後人お途末錫死する事汝二国も高  
らね事ども管公此はと角給ひ他の國の時く角ありと田畑を没し此國に治る  
降ざる事我不徳に國と守るまを天の罰せむ所なりん斯多氏と腦ん  
是我罪なり然とも私計り所あらば天の君の勅と奉る此國に未たり  
天納受生まきとん我一命と断せ給ひ仰ぎ頼る多氏の慈ひ救を  
給て御身と淨めを給ひ當城の神小祭文と捧げ両乞ひ終ひし  
不思候る晴天忽らか曇り雷四方小雲と逝光天は元満く大雨類  
降し病床に下れる者も即時に横生田畑草木をくくろるほひ青く  
ほりく美民を悦び子の森足の端とらとまふは管公の河徳と下勇  
こらるる此時の吉候なり今より毎年七月廿五日小川山の神子向  
くく流宮の竜燈院を踊り  
世に是と善いゆりては二祝の法然上人の事  
略しりあり妻く捨建の扁出

菅丞相の姓菅原名道實字の三是善郷の御子母八伴氏より兼和三年延  
生給ふ幼きより穎悟かしく父祖を承り壯及んて文章自  
進文章と屬し詩賦と作る貞觀四年文章生補せり益官位進  
ん右大臣より給ふ昌泰四年正月廿日院紫太宰府に左遷す延喜  
三年二月廿五日配所に於て薨す五十五歳安楽に葬る  
一條院正曆五年二月大政大臣正一位と贈給ふ

本朝文粹大江匡衡曰

天満自在天神或監梅於天下輔導一人或日月於天上  
照臨万民就中文道大祖風月之本主也  
松山鎮之古趾遍照院より五丁鉢南の田の中より圃より小川あり磐よりこれと田井の  
堂よりつひ坐のり  
此地は管公當國の守護に任せり下り給ひ一時在留し給ふ所の館也





遊<sub>ニ</sub>晚春松山館<sub>ニ</sub>

官<sub>ノ</sub>舍<sub>ノ</sub>交<sub>テ</sub>簷<sub>ヲ</sub>枕<sub>ニ</sub>海<sub>ノ</sub>濼<sub>ニ</sub>

本<sub>ノ</sub>来<sub>ル</sub>風<sub>ノ</sub>浪<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>塵<sub>ヲ</sub>

轉<sub>ニ</sub>移<sub>レ</sub>危<sub>ノ</sub>石<sub>ヲ</sub>開<sub>キ</sub>中<sub>ノ</sub>道<sub>ヲ</sub>

分<sub>ニ</sub>種<sub>ニ</sub>小<sub>ノ</sub>松<sub>ヲ</sub>屬<sub>ニ</sub>後<sub>ノ</sub>人<sub>ニ</sub>

低<sub>レ</sub>翅<sub>ヲ</sub>沙<sub>ノ</sub>鷗<sub>ノ</sub>潮<sub>ノ</sub>落<sub>ル</sub>暮<sub>ニ</sub>

乱<sub>レ</sub>絲<sub>ヲ</sub>野<sub>ノ</sub>馬<sub>ノ</sub>草<sub>ノ</sub>深<sub>ク</sub>春<sub>ニ</sub>

釣<sub>レ</sub>歌<sub>ノ</sub>漁<sub>ノ</sub>火<sub>ノ</sub>非<sub>ニ</sub>交<sub>テ</sub>友<sub>ニ</sub>

抱<sub>テ</sub>膝<sub>ヲ</sub>閑<sub>ク</sub>吟<sub>ニ</sub>涙<sub>ヲ</sub>濕<sub>レ</sub>巾<sub>ヲ</sub>

鴨<sub>ノ</sub>神社

安<sub>ノ</sub>孟<sub>ノ</sub>川<sub>ノ</sub>の東<sub>ノ</sub>の岸<sub>ノ</sub>加<sub>ノ</sub>茂<sub>ノ</sub>村<sub>ノ</sub>の村<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>生<sub>レ</sub>土<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>なり 例<sub>ノ</sub>祭<sub>ノ</sub>八<sub>ノ</sub>月<sub>ノ</sub>廿<sub>ノ</sub>四<sub>ノ</sub>日

祭<sub>ノ</sub>神

一<sub>ノ</sub>座 賀<sub>ノ</sub>茂<sub>ノ</sub>皇<sub>ノ</sub>太<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>宮 延<sub>ノ</sub>喜<sub>ノ</sub>式<sub>ノ</sub>出<sub>ノ</sub>阿<sub>ノ</sub>野<sub>ノ</sub>郡<sub>ノ</sub>三<sub>ノ</sub>座<sub>ノ</sub>之<sub>ノ</sub>内<sub>ノ</sub>也

神<sub>ノ</sub>谷<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>社

白<sub>ノ</sub>峯<sub>ノ</sub>の麓<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>谷<sub>ノ</sub>村<sub>ノ</sub>の村<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>の生<sub>レ</sub>土<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>と移<sub>レ</sub> 右<sub>ノ</sub>同<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>名<sub>ノ</sub>帳<sub>ノ</sub>出

祭<sub>ノ</sub>神

五<sub>ノ</sub>座 春<sub>ノ</sub>日<sub>ノ</sub>大<sub>ノ</sub>明<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>四<sub>ノ</sub>座 五<sub>ノ</sub>社<sub>ノ</sub>明<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>と移<sub>レ</sub> 荒<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>宮<sub>ノ</sub>一<sub>ノ</sub>座

三代實錄曰貞觀六年十月丙丁巳癸亥國從五位下賀茂神神谷神等

並<sub>ニ</sub>授<sub>テ</sub>從<sub>ニ</sub>五位<sub>上<sub>ニ</sub></sub>

祭城山神文

維仁四年歲次戊申五月癸巳朔六日戊戌守正五位下菅原朝臣某  
以酒果香幣之奠敬祭于城山神四月以降涉旬少雨吏民之困苗種不  
田某忽解三龜試親五馬分憂在任結憤惟悲嗟辱命之數奇逢此愆序  
政不良也感無微不至伏惟境內多山茲山獨峻城中數社茲社尤靈是用  
吉日良辰禱請昭告誠之至矣神其察之若八十九鄉二十萬口無損一  
口無愁敢不穎藻清明玉幣重墨以賽應驗以飾威撻若甘澍不饒早雲  
如結神之靈無所見人之望遂不從斯乃俾神無光俾人有怨人神共失  
祭或踈神其裁之勿惜真祐尚饗

菅公祈雨之古蹟

神谷村より嶺山より此山上より城山の神と祈り終りて後  
山上に天満天神社あり佐々木山天神とて遍照院より十丁ござり  
正南よりとて山なり

延喜地藏

神谷村より白峯に登る道の傍より壺驗ありて石佛とて

天皇社

白峯の麓高屋村より土俗血の宮とて村中生土神とて

祭神一座

崇徳天皇

例祭九月十七日

長寛二年九月中旬天皇の金指と白峯に登り奉る時此地より指中より

御鮮血より出りて是に依て此所を宮と營之血の宮と称し

例祭九月十七日執行ふ言又其御鮮血のまじりて日なりと土人言傳たり

綾松山洞林院白峯寺

南有海村あり神若高屋より西道の登道あり其場八十二

本尊

千手觀世音菩薩

智證大師作 立像長三尺三寸

千躰堂

阿弥陀如来 脇士

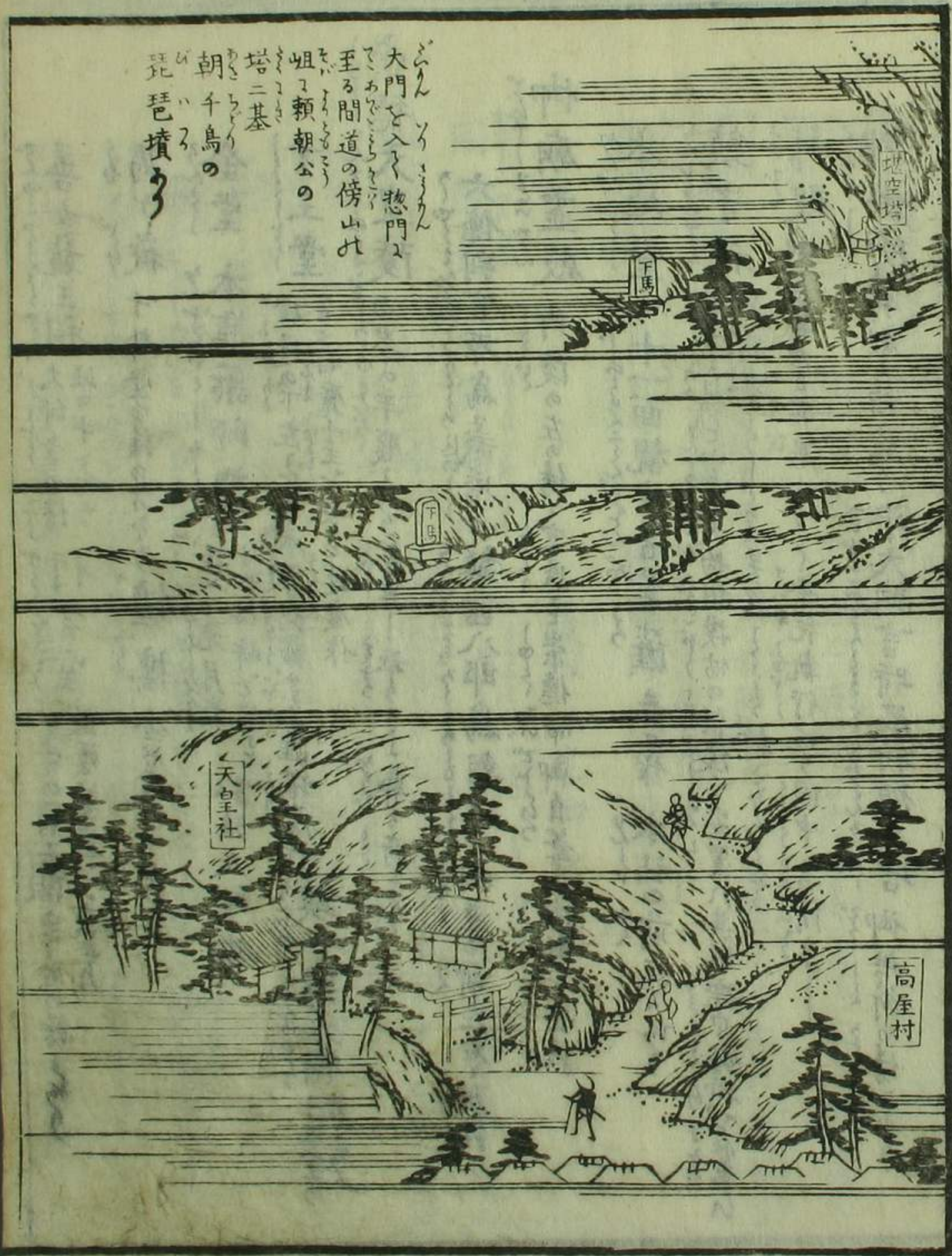
觀音勢至 弥勒千躰と安ん 本堂の

諸神勸請塚

本堂の傍より 大師堂 弘法大師と安ん 本堂の左より

藏王権現社

山上より並に赤社あり



大門を入て惣門  
 至る間道の傍山に  
 姐頼朝公の  
 塔二基  
 朝千鳥の  
 琵琶墳あり

天皇社

高屋村

金五ノ七



白峯寺大門

延徳地藏

神谷神社

神谷村

善女龍王祠 大師堂の傍 行者堂 本堂の前石階の下右の傍あり

馬ヶ嶽 千軒堂の後の方あり 鐘樓 金堂の向あり

金堂 本尊薬師如来 十二神時と安んじ 弘法大師作

十王堂 礎石の下左より本尊は蔵書庫遷座作 鎮守辨天祠 十王堂の

宗徳天皇陵 白峯の半腹より茶毘奉りて葬る所あり

六條別官源為義塔 鎮西八郎為朝塔 御墓の前左右列に

御廟靈殿 御陵の左の傍に宮造と崇徳帝御自筆の御歌と安ん

本地堂 十一面觀世音菩薩 春日作 本社の前左より

鎮守社 同右と山主の天狗相摸坊の歌像と安置其形兜中鎧掛と安ん

拜殿 例月廿六日屏風より祭祀執行り國中系請多し

御供所 拜殿の傍あり 平大納言時忠祈願之塔 御供所の傍あり

櫻橋ノ西樹 拜殿の前左右列に

西行腰掛石 橋の附の傍より石上より西行の石像とあり長凡一尺五寸余坐像之

石燈臺 御供所の傍あり玉つらねあり其形推して世人れと頭燈と

初額門 正面の門より 額面頭燈寺之三字

後小松院御宸筆

同隨身 左源為義 右源為朝 木像 長凡三尺余坐像之

王章木 門外の右の傍より大樹より年毎に時々の王章とて此木の本れ

里俗傳云天皇此國に流され給ひ一時郭の聲を聞きて祈ひて祈ひて

と申し出させ類うと思ひ召さるるに

鳥の音を都ぞ志のいふ此里とてよむと云ふと 御製ありしより

まほしき王章と此木の下に年々人々を時鳥の落文とてかゝる事と他所あり

無中もろくもれん斯る故と有る此は限り後世好事の者の附まの彼もん  
 其是非ともん然も時鳥のこも鳴るの明もり彼管互相の河原  
 道明ももり鳴るの明もり此の御縁もり鳴るの明もり  
 流もり此の御縁もり天皇の御更れればも有ん  
 老年友入り手澤もり物も口木葉の巻もりのこも余すもり更もり  
 過頂白峯もり時里入もり得もりの被捧の葉の両もり折もりの  
 方より巻もり恰も王音のじ



此のどく左に巻もり  
 右に巻もり

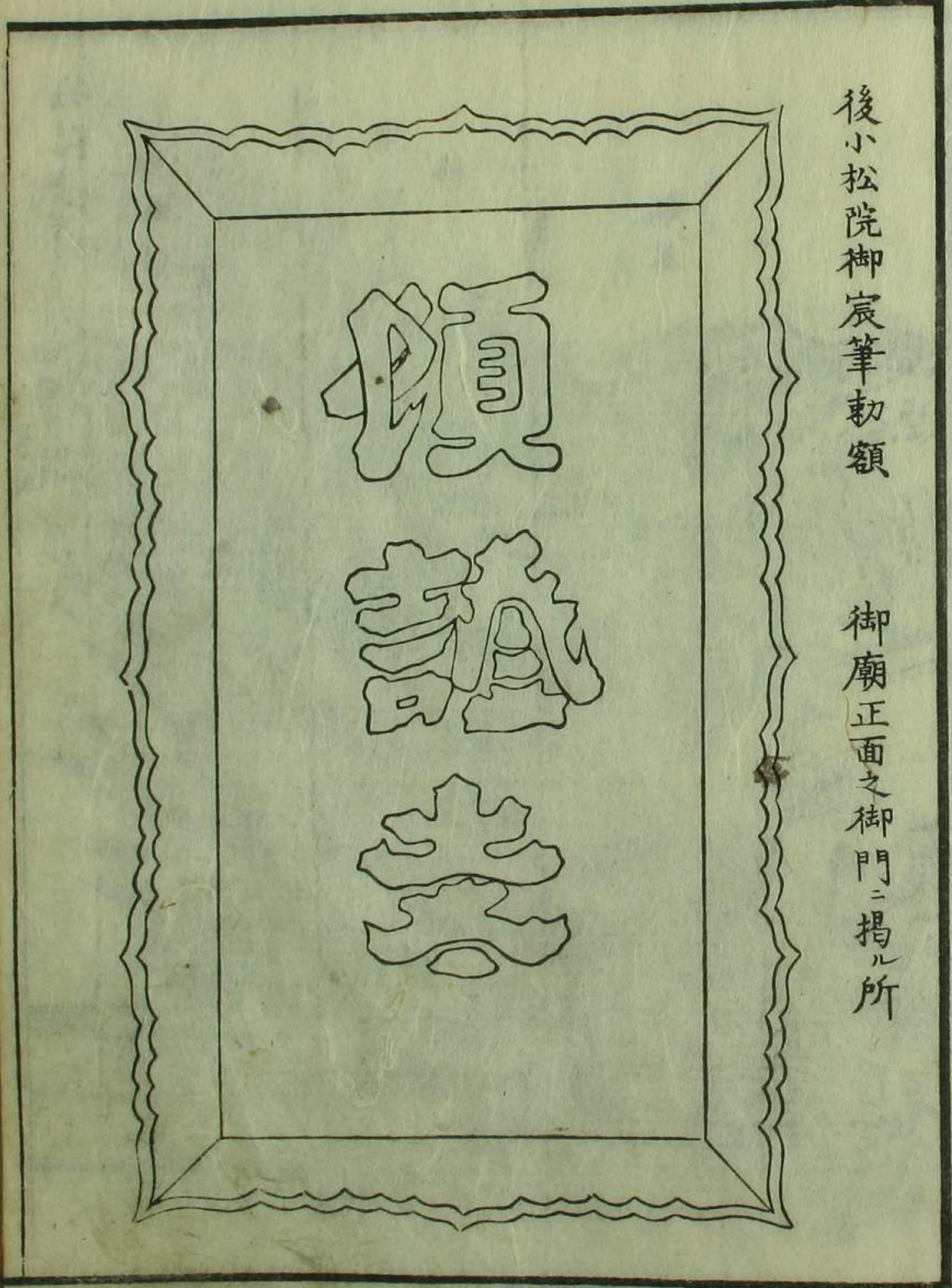
唯雄もり左右のからりや其方ともん何すれ此も得もりの地  
 の品類もり其製もり

本坊 十一王堂の左 玄関方丈客殿庫裡官庫室藏唐門勅使門小結構  
 末院 真藏院室積院一乘坊 池之官 室積院の傍あり  
 茶堂 惣門のまより通後の縁人 淵伽井 根巻もり道の右の傍あり  
 弘法大師の御影あり

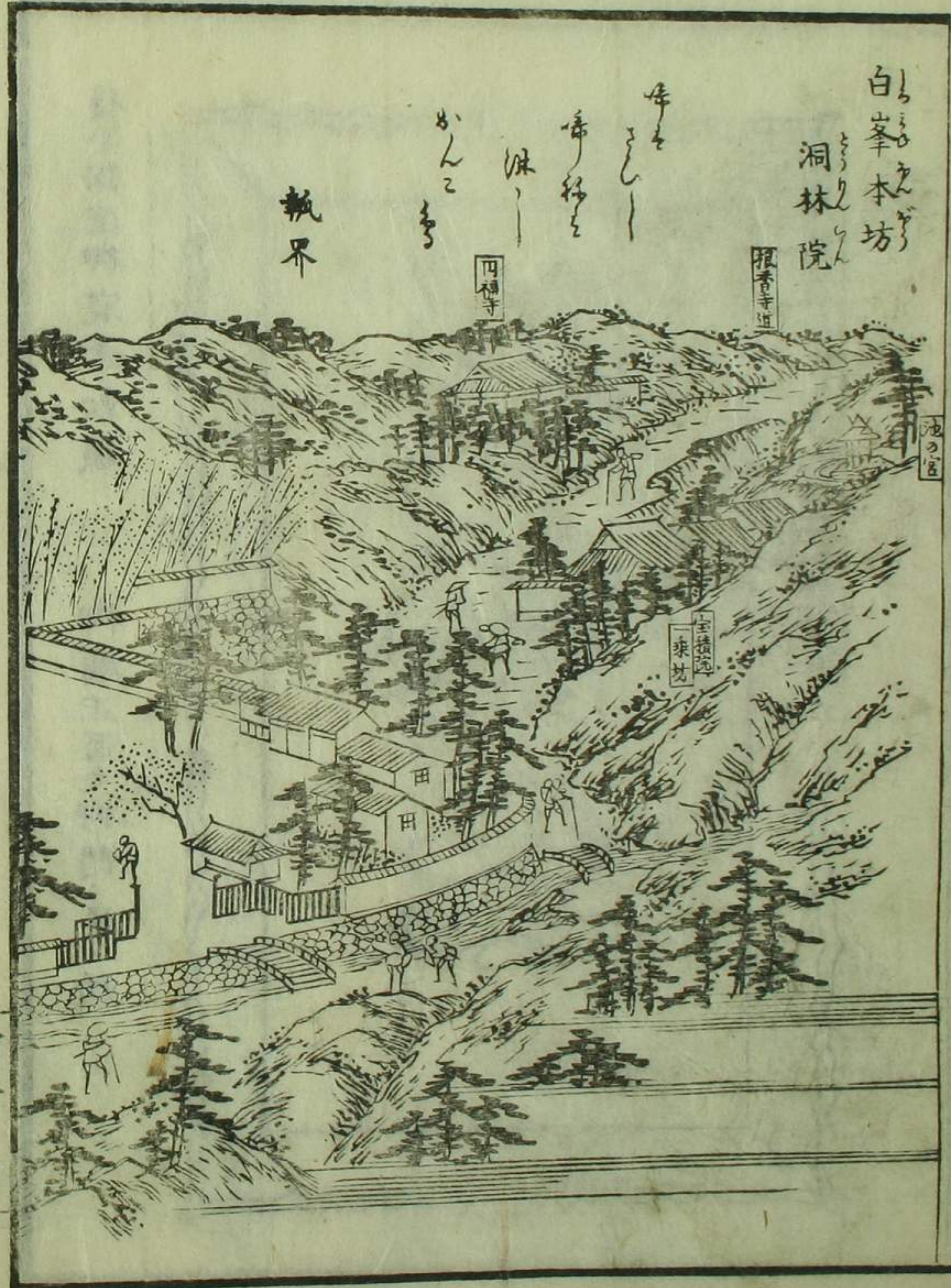
金五ノ九

後小松院御宸筆勅額

御廟正面之御門ニ掲ル所



頌誠業



金九十一

大門 惣門より三丁許西より神谷高屋の両道より登りて出會

右大将源頼朝公之塔 大門の内道の傍山の垣より十三重の石の大塔二基之文治年間

琵琶墳 頼朝公塔の右の山方より後嵯峨院御奉納の朝千鳥の琵琶の星霜

朝千鳥琵琶之由来

抑此朝千鳥の琵琶より人王八十七代後嵯峨院當山御寄附せらば  
五種の靈寶の其二方此琵琶と朝千鳥と号する縁由と尋ねる人王八十三代土  
御門院と申奉るに後鳥羽院の王子より建久九年僅に御歳四歳にて即  
位し給ふ此君常々琵琶を好ませ給ふより父上皇秘藏にせらる所の琵琶  
の三つの内少く流泉の琵琶とて流れて給ふが順徳院に御譲位の後  
承久三年御父後鳥羽上皇御謀叛より隠岐國に流され給ふ此時土  
御門初院より土佐の國に遷され給ふが御秘藏の琵琶なる故に配所は

持せたり然るに御船幾内中國の海と經る當松が浦に着るに院警固の武士を  
召て弓手を見ゆ高き山に松山あり在るに命にけられ武士謹んで命  
の如く則ち綾の松山より白峯山と号し宗徳天皇の御廟處なりと言ひ給  
院より御落渡まり彼御廟所へ御參籠し給ふに御廟所より出  
されしに武士等上聞と憚り後難と恐る許し奉らざりしに  
御力なく船中より御心かろの法施しせらば彼流泉の琵琶とて出  
揚真操石象等の秘曲と彈し給はれ不思議なるに磯集の數  
多の千鳥たちを聲とて實に妙音に聞居る躰なり院もすんく  
御意と清し流泉啄木揚真操の三曲と終夜たんと給はる從ひ奉る  
武士とて心かると浦人も感入り聞居る斯く漸く夜も更て浦人  
も退散し警固の武士も臥るに院は益々をては彼御廟所の方に

昔為萬乘君  
 今為一丘土

君がまゝかや  
 いづもか  
 あいさいの  
 わし  
 ちか  
 ちか

名留無見松丘下骨化為灰  
 草澤中石上碑文消不見古  
 人墳際淚生紅



馬ヶ嶽

白峯本堂  
 宗徳天皇御廟



金五ノ十二



向い再び既洛の御更と祈らせ給ひまゝに既ふ夜も明まんとする頃不慮瞬  
 主維ふ現ももり松山の方より冷風と吹来るといふ中宗徳天  
 皇の御衣を給ひ朕流泉の秘曲を聞て歡喜せり必ら思ひ當る更はんと  
 仰けりて院御耳入るも是に不思議やと空をらんりて宗徳帝と如  
 左府頼長公判官爲義八郎爲朝とて保元の戦ひに亡びて人々前  
 後と守護しやが松山の方飛去る院はまをて悦ばせまひて頼り  
 く思召しりて夜も已に明ぐまふよが時秘曲小感せし数子の衛一度り  
 かの立去りたる是より朝千鳥の琵琶と名づけ給ふれば神  
 靈の告をせりて違て後堀河院四條院ホの二帝と経て土御門院カ  
 二の皇子邦仁親王御位に即せり則ち後嵯峨院とれなり土御門院  
 土佐の國より後阿波の國から給ひ終て彼所より萌とせり

斯る御因縁あるまなるより後嵯峨院御寄附ありとせらる

尚此余御奉納の四種とつり

一唐本法華經 筆者終南山道宣律師

一同二十八品和歌五十六首 則印板經之裏和歌二首宛 作者廿八人の清書名畧之

一青磁香爐 千鳥手 高サ六寸余 口徑七寸 せよふきの香爐とま

一同花瓶一對 浮牡丹 高サ二尺五寸 口徑七寸

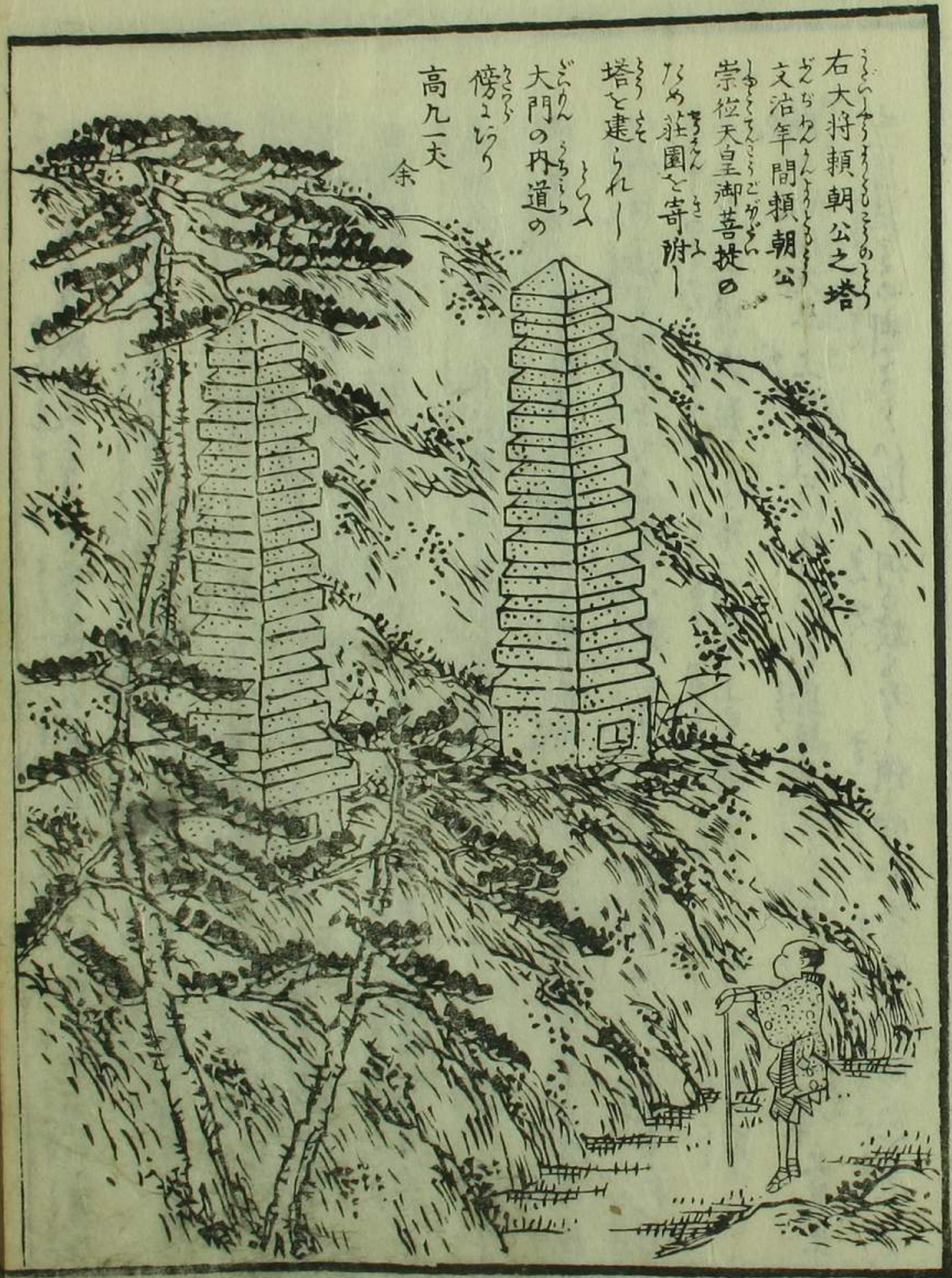
児ヶ嶽

境内の西の端ありて百余丈の山嶽なり傳云景行天皇の御宇此嶽より  
 一人の児出現は是則横濱明神なりとぞ然れが日本武尊は八十八の水  
 とわたりて時の変ならん傍に小堂あり不動明王と安置は麓と  
 青海村と号は嶽より流る瀧水より流るる松浦に出る

當山の往昔弘法智澄西大師の建まなり弘法先此山に登りて空  
 珠と埋て阿伽井とやうに修法と行ひて彼空珠の地滝つがとなりて三十方

小辰く其水今増減なり智澄大師入唐飯相く金藏寺止住し遠く  
 此山に瑞光ありとんひる希有の思いと登山し候ひし所は高山に  
 法守相模坊老翁に泥し我れ此山擁護の靈神法輪弘通の聖者なり此  
 地は七佛法輪と轉じ慈尊入定の靈地なりと云く則山中と導き教相も  
 二法しひく本尊と造匠四十九院と草創し給ふ其後人皇七十五代崇徳院  
 保元年間當國に遷されせ給ふ松山の御所なり候はれし三人報が  
 岡に六年赤後九子ふく終る明御ま候は御遺詔より當山西北  
 の山岳に於て茶毘當峯に葬り奉る近侍者なり遠をの阿闍梨  
 章實の僧国符敍が岡の御所と當寺に接し頃澄寺と号け御  
 菩提の昂し奉るまゝに御靈魂甚しくましく奇湍帝都よか  
 うやき御恨と深うれば御代の聖主世の武將も思はれぬ奉り

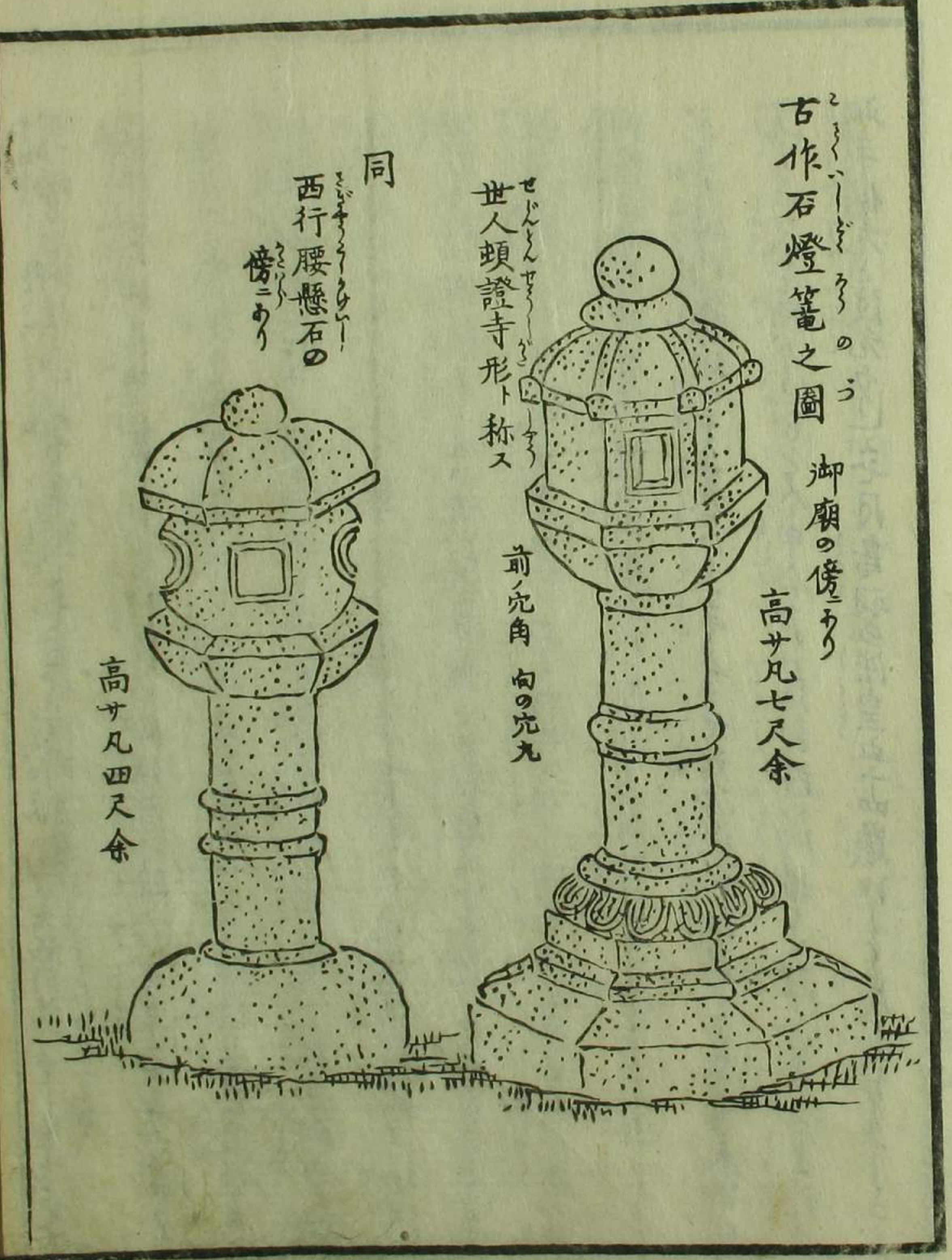




右大将頼朝公之塔  
 文治年間頼朝公  
 崇徳天皇御菩提の  
 塔を建られし  
 大門の内道の  
 傍より  
 高九一丈  
 余

御府莊園と寄く御菩提と吊ひ十二時不所の三昧漬経所と當山と  
 論旨陰宣と成下されてこれを行ひ或は法樂社奇種との捧げ物とて看め  
 奉り給ふ始り續後院と申奉りかたは法兼元亨六月廿九日追号ありし崇徳  
 院と申奉る其後漸く御灵威と忠を社禮と嚴小宗教しむ今このまゝ海  
 河内の西郷治兼と寄らる新庄支治年申頼朝公の寄附あり  
 一 崇徳天皇御宸筆尊顯 御殿納る重一同 弥陀名号 良徳親王御裏書 御判有  
 一同 御自愛筆 一管 一 崇徳天皇御感得佛舍利二探 首白  
 一同 御影 一幅 二品幸仁親王御筆 一同 御影 爲義像 爲朝像 三幅 長慶筆  
 一同 尊号 一幅 増件筆 今尚存一宝庫と藏ム  
 抑崇徳院と申八人王七十二代の帝は鳥羽院第一の皇子之御禪の頭仁御  
 母の中宮藤原の璋子待賢門院と号し 大納言藤原公實が娘なりしと  
 白河の法皇御影といふ六月ありて后にまらる

元永二年五月頭仁延生すりく保安四年の春五歳と御位に即せ給ふ園白忠透極  
 政より此時天皇の曾祖白河の法皇存生すり院中又於て政務を執せたまふ  
 是と本院とらふ鳥羽院と云ふ太上天皇とも又新院とも申さる大治四年七月七日白河  
 此法皇在位の時より自ら政務を執行し位を譲りたまひて後堀河鳥羽二帝より當  
 宗徳帝よりたまふ院中より政務を執せたまふ  
 白河法皇崩御の後鳥羽上皇憚らせ給ふ所より前関白忠實が女奉子に月日  
 高陽院と申し又太皇太后の長實の娘得子と云ふ女御より美福門院と申  
 御親愛深き人終りに政務もたもたせ給ふ所より小保延五年美福門院  
 の御後御子延生すりたる是と體仁君と申さる上皇御位に譲りたまふ  
 今上宗徳院の御親子に給ひ割り上皇御親愛の余り東宮と定め給ふ  
 斯て永治九年上皇御落飾りより鳥羽の法皇と号し奉る時治年又其年  
 十二月法皇の御位に譲りたまふ何の故もなき俄に當今宗徳院の御位に廢り  
 金五ノ十六



古作石燈籠之圖

御廟の傍あり 高サ凡七尺余

世人頓證寺形ト稱ス

前穴角 白の穴丸

同

西行腰懸石の傍あり

高サ凡四尺余

崇徳院の御在位十八年と云ふも幼少に御位に即せ給ふ故今年も五十二と云ふも  
御位と云ふ給ふ是より鳥羽法皇と云ふ院と申崇徳上皇と云ふ院と申改政勢い  
法皇の御討らひしは新院の何れ構を給ふ有らぬ如くは是より御中諸  
度不卒に七月と送り給ふ是より久壽二年七月當今近衛院十七歳に崩  
給ひけれは御位に全く崇徳院の御長子重仁親王に渡らせ給ふべきにや  
法皇の御んらひして法皇第四の御子雅仁に依り御位に即せ給ふ是則後白  
河院より是待賢門院の御後を新院より御同後を余るぬ御まされ  
は美福門院の幼きより養ひたまはせ給ふ近衛院のからりよと云ふ美福門  
院よりのみを斯くもいと申合はれは孫新院の御根も深くかりる去程に  
此年保元と改元ありし七月鳥羽の法皇五十四歳に崩御かりしに

當今新院の御中も日々漆々謔りて朝暮御心よりいさむる夏の有  
うまう近習の人々も面々辛ふ夏も多う終御謀叛を思ひはる是  
より新院は白河の御所へ御幸しつ味方と召給ふ宇治左大臣頼長は関白忠  
通と不和より此度の密謀の頭より史直地と泰候する六條判官為義平  
右馬助忠政も召應はる白河と泰は為義の子息也義朝一人の外は皆新  
院の御方より中ふ鎮西八郎為朝は強弓の精兵古今無双の勇士なり内裏と  
関白忠道以下と始り武士は下野守源義朝安藝守平清盛泰候と守護  
奉る既保元元年七月十日の卯の討合戦に於て昨夜鎮西八郎内裏と夜討  
とんとと云はるも左府頼長と云ふ用いらるは又却て官軍寄来り西軍  
龍虎の勢いとは無戦と討死するの女は尤為朝が矢を射倒るる数と  
云ふべ然とも官軍は多勢ふと終新院の軍敗と左大臣頼長は流し矢に

羅山集

源為朝

為朝為義八男也  
 替刀絕人獲臂善射  
 為義責其剛傲遂之  
 鎮西故去鎮西八郎  
 為朝居豐後國欲棄領  
 九國九國人不肯從  
 各築城以排之為朝  
 大戰二十餘回拔城數十餘  
 壁三年之間九州皆入平  
 東有稱惣追補使時  
 為朝年僅十五其後保  
 元之難與為義同奔

六條判官為義



金五ノ十八

崇德上皇之命子  
 義朝之兵大戰既  
 而克敗兄弟多死  
 為朝逃竄而後邊  
 然被捕謫伊豆  
 大島為朝押  
 領諸島不輸  
 官祖嘉應之  
 年狩野茂光奉勅  
 往攻之為朝放矢一船  
 覆而兵士沒死官兵  
 辟易不敢近焉為朝  
 慮連勅之罪而自殺  
 非力盡而死也壯勇氣  
 弓天之勁日本古來  
 無出其右者

鎮西八郎為朝



中つゝ死に新院に落し給ひし御室の知果院の僧坊より落飾し給ひし  
出家の形よりせし御戒の師仁和寺の寛遍法師の住坊より御寄宿より  
御製よりしきや身を流雲よりしとてはるのせよ伊はべり

夏ふきのまゝらむ程は志ふとて覺はるるの心はとてくれ

同廿三日讃岐國へ遷し奉るべきに宣下せらる斯く八月三日讃岐の國よりせきよ

是より林田の御所より三年まじりて裁か問ふ六年まじりて終り  
期せよせよい當山より奉り奉るをい前より著せられと畧ス

山家集

新院にわさふおしはりまゝに便おけり女房のこゝろ

水ぐさのこゝろ海よりおちぎたるとやわらうに波をよみせん

いづれかゝるはなはなとてはるる水ぐさのこゝろ  
西行

いづれかゝるはなはなとてはるる契り道おちるべからず

かゝるる涙よりいづれかゝるる君よりいづれかゝるる人

頼むらんをいづれかゝるるはなはなとてはるる西行

古今昔聞集より新院に和歌の道より傳はるるを結ひしより愛事止まりされこれ  
通も廢せしめり悲しき西行法師より寐会法師よりいづれかゝるる

言ひおちるあはれけ結ぬ折すより有らば身を悲しむれ西行

敷き山やたえぬ道もなれりも君よりいづれかゝるる寐会

山家集よりわさよまゝに、松山より西に流るる水よりけむ

ね山の波よながるととて舟のやぐらよりいづれかゝるる西行

ね山の波のくさかみよとてわさよ君よりいづれかゝるる全

一書より西行法師ね山の波よながるととて舟のやぐらよりいづれかゝるる時  
御廟鳴動よりね山の波よながるととて舟のやぐらよりいづれかゝるる



金五ノ九ノ元

西行撰集抄去新流の御墓所と拜と奉らん  
 白峯とて所々御墓の侍  
 や君昔のむゆ  
 なとそもからん  
 ふやうはさん  
 西行  
 松葉集  
 人ぐと一玉の  
 野の  
 今

西行撰集抄去新流の御墓所と拜と奉らん  
 白峯とて所々御墓の侍  
 や君昔のむゆ  
 なとそもからん  
 ふやうはさん  
 西行  
 松葉集  
 人ぐと一玉の  
 野の  
 今



判利もし由もめらば官も葉屋もよにこそいふれ高住も  
おら守我おもさ度く彼國王ともいひ終いんたれも臨生即忘りて  
多侍少只行くと有り思と佛果多満の位のせや座しく侍るとも  
思いつくるとすゝ涙のさそ出侍りてい

よ一平君むりけむの座とよもめららん後い何うも

とちうとんとて侍りて盛衰いかに始りぬとていれども  
侍りて此前文仁安の頃西園とて侍りて次に後加えとて  
つふ座とよとて住りていり山家集の下仁安二年十月末とて  
とて新院崩御長考二年より四年後の事とていれども  
程と御墓と侍りて由かれ仁安三年のころに又水蓋の岡と  
つとて再び西園侍りのゆとて治承二年のころに十二

新院崩御のゆ後後後後と申奉りて治承九年六月廿九日退号  
崇徳院とて申奉りて御霊と慰め奉りては御憤りの散  
少や同三年十月平相国清盛朝家と恨と奉り後白河法皇と鳥羽の離宮  
押と奉りて松殿関白基房と備前一太政大臣師長と尾張一源氏と余  
按察大納言源實方以下日御雲客四十三人の官爵とて  
是は事やとて崇徳院の御宇とて申奉りては御霊とて  
少奉らとて元暦元年正月後白河帝の勅とて春日の末北河  
原の東に御廟とて造営せとてい

故細川隆興守願氏のよ長式部大式部伊豫守とては九國の大將  
と下されり此令が後後國とて兵とて集むるは延文四年

月二日俄一病其物ねひらけりて自らほざき我崇徳院の所収  
 を落し軍勢の兵糧の料所先行いし依り重病と交り天の遺八  
 四千の毛乳より五碗六筒余を同凍り風より盛んを吹く如く冷  
 かり水と飲み沸之湯のどく暑や濃りや足助り兵士無し料  
 びく阿比留にこれに醫師法湯の音病の者も進分んとて病の  
 四五の中猛大の弊を強る極々整々更進分人も多かり病は七日  
 常りす即の射は黄る旗一層一層混胃の兵千弱より三方より同射  
 波とわき押寄せ難いふく心腹此同地集る兵も  
 百余人大庭より走出て散り射る前種つるをばち物より追いつ  
 半時どろと戦ひ多し揚より寄る飲りて母名をけるは十余  
 騎大将細川伊豫守と家人行吉掃部助とを取らんとすなり



貫て悪しと思へ者とい皆打らるる是看や兵もく二ツの首とて以て  
 此は大手の敵七百余騎勝どきと三声ぶつと作つて飯をくれ此奇は天  
 上へ雲に乗ども白峯の方へを飛りて変化の兵飯りこれこそ是を防ぎつ  
 者ども討しぬらんへつ人も死を手負とんつても悪はあいらる不思議  
 ごと互に語り互に問いて暫くは伊豫守も行吉も同時墓なく  
 成りて誠不思議なる支ふるなりき 神霊の新たり支斯のまじ

一 松山百首和奇并追哥三十首一軸 頓證寺法樂 飛鳥井宋雅卿筆

右百首内  
 あらびくも本末の色は白峯の雲とみればこれのまじ 正三位公種  
 立はく霞と雪を白峯の外まじつて余所もみん 九條植通公  
 同三十首内

一 勅額并右兩種之添状 一通飛鳥井殿より富小路殿、  
 一通富小路殿より富山院主、

一 和歌三十首 九條植通公富山御恭詣御自詠自筆則典書有之

一 鎮西八郎為朝矢 一手

尚高僧知識の作佛御宸筆類經卷教集ホ許多有之と云ふは在畧之

一 白峯縁起 一卷 少納言の道常宗世寺行俊卿清書

右の内倫首ホ多有之示

右外款白峯縁起と雖有之富寺の禪侶と俗姓之高早と縁せ凡卿  
 相り可半之由院宣と給ふ有之政世人と永宣首ト云

一 源氏物語 五十一非 烏丸光廣卿筆外頭大炊御門經名卿筆

右の内須テの巻終末しふ足でり何れらの事ホ多と云ふは  
 然も不安永年同康成の浪士大河内軍物と云る人和歌と好く善以哉  
 時市中の骨董店と須テの巻と求む年と後此國へ行御ト不斗  
 幸山と緒で此由と縁あはれと云へるは右不足の品は遠く凡衆人壽

異の思ひとらん南海の事と物実東に傳ひ和奇者源の事小つり  
自ら本之版を事まじく神の導くを給ふ所なりとて別ち奉納せりと  
我々寺僧の物語あり史筆のつとむる事記と  
又天文中制札二枚

禁制

白峯寺

- 一軍勢甲乙人監妨狼藉之事
- 一伐採山林竹木事
- 一寺領中陣所其外申懸非分之儀事

右條々堅新令制禁也若於違犯軍者可処嚴科者也  
仍下知如件

天文八年十月六日

讚岐守源朝臣判

右八細川後守持隆の事なり

南海治礼記曰天文八年己亥秋細川晴元阿讃の諸將命命録川

河野と追討せし中畧細川晴元より大内義隆に膠合し兩家より豫及へ攻  
めし即河波屋形細川頼俊守持隆と軍將とて阿讃の兵二万余人  
海陸二路に分つて豫及へ向ひ陸兵豫及後の北條に到つて勢拵とす  
此地に崇徳院の御廟領なり深く敬し軍律と嚴重に云々  
右八延文三年任保守繁氏に復と掠めし神罰と蒙り更らざるは後  
持隆殿に丸妨狼藉と禁止し制札と出さるなり

禁制

白峯

- 一軍勢甲乙人亂妨狼藉之事
- 一伐採山林竹木事
- 一付り放火之事
- 一相懸寄宿多兵糧等事
- 一右條々當手之輩令停止若於違犯者速可被處
- 一嚴科者也仍依仰下知如件

天文八十日

彦次郎之相判

彦次郎ハ三好家の通稱ニシテ是則三好實休也

後豐前寺義賢を号し右の制札又前寺字以細川の制札本

今存一々當山の什物云々

今有ハ神靈の掲書奉々今更々云々ハ氏跡更四國霊場の札所をれ山嶺

の峻路といふハ諸人等々運奉寒暑陰晴の差別なく日毎々登山

と云奉間ハ原素此地ハ松山と号け古々教も縁ドる所云々

四面に列る浦里より山路川辺云々名々々々古跡を多あり其中

大門の外下乗の傍より眺望殊々美々東嶺第一の風景云々

高山といふ安益郡云々の故々後の松山といふ云々此山云々松山と号する云々

新古今云々云々云々君々々々松山云々云々云々二修院續後

金五ノ卅五

松ヶ浦

松山の津 同上

後拾遺

松山の松の浦風吹よせを志ひくくひくく急々々と見 中納言定頼

一書 志見の古哥貝の面々文まらくくくと又赤と鳥居形らりあつり其是非

とまて守を今少くく

松ヶ浦神社

同所より伊弉諾伊弉册の三神と勅請ハ當社の神主富家淡路云々

松樹石

松ヶ浦より出ば 松石 雲根志 日誓及宇治成頼寺石と表ハ明和三年六月

又江呂石亭の休藏云々所々松ヶ浦のカナ本云々あり其石名云々

磬石

白峯の山中より出る色々黒く是と云其音金の正僧云々

網之浦

松ヶ浦の向々あり

松ヶ浦ノ産

淡海石亭所藏

雲根志ニ是ヲカナホト

漢名曰鉄樹ナルベシト



長サ二尺高七寸  
色如漆似鉄

同浦之産

松樹石

色赤黒

石面松ノ枝ノ如シ

目方至テ重シ

鉄樹トモ云ベク覺ユ

長サ七寸余  
四九寸五分



曉鐘成

可藏

白峯佳住子ヨリ

得ル所ナリ

新勅撰 浪風も長采るる代のまふらひて綱の浦人まね日影を交 正位家隆

萬葉 霞立長春日乃晚家流和豆肝之良受村肝乃軍王

心卒痛見奴要子鳥ト歎居者珠手次懸乃宜

久遠神吾大王乃行幸能山越風乃獨座吾衣

半爾朝夕爾還比奴禮婆大夫登念有我母草

枕客爾之有者思遣鶴寸乎白上細能浦之海

處女等之焼塩乃念曾所焼吾下情

泊の磯 細浦ニ隣る

松ヶ浦とまりの磯とまのの石もまのの石もまのの石もまのの石も

青海ノ浦 白峯の麓青海村の海辺リリ

南海治乱死んぶのモロウ

青川氏部少輔ハ數代の居城を明控て家人從類ハ白峯の御領有

海浦(引取)其身、徒兵二千人を具し松浦(到)壱岐の廣島(渡)ト云々

天皇ノ社 白峯の麓青海村にあり主人烟の宮と云々天皇の王伴と白峯におつて茶毘ノ奉り時其烟をばさびさしぬと宮をまき斬り去る云々

祭神 一座 崇徳天皇 例祭 九月十九日 別茶毘ノ奉り日あり云々

吹雪谷 今泉の谷より白峯より高松へ出る街々の右より寺より凡十四坪あり弘法大師宝珠と云々其井庵津殿と云々三ツの谷に流る

乃生崎 白峯の北の麓松浦の東より乃生村の溪より海岸と乃生の端より一説に此乃生の海邊に西行庵と錯びく暫く住みしと云々古跡未詳云々

西行撰集抄云々過ふ一仁安のころ西國より船終けり待り次く濱及び返の

林より下り皆く住みき深山辺のなるの葉をく庵後ひてつま本よりたたく山

中の氣を此の本どくよよなる風はとて人々喚子を遠のりの勢は月よまれ

うらぶといふ事は長夜の曉まきく猿のこゑと聞くとるる腸と云々待りかゝる

酒後の世のふれも侍り心も心もろくもろくもろくもろくも斯くも侍り云々

金五ノ卅七

浮世の中を思ひとて思ひ侍り云々之を思ふと云々

新洗の御墓跡と拜と奉らんと云々ト云々

山家集抄曰く續後白みほ返と云々は「字源」後松山の木の海田に能

保の林といふ所あり院の御墓(近)所云々是より外に林といふは今ハ乃

生村と書けの字みのまきと云々又保と云々音通へ乃生返と云々返も乃

此地北に海三方の山あり別世分の如し撰集抄の文を符合すればこそ云々

名産五加皮茶 白峯や製法其味善し

本草綱目五加其葉作蔬食去皮膚風湿五加皮根皮也造酒用根皮去

骨莖葉亦可也ト云々然るも葉も能あり病と治するの二也云々

石文蛤 松の浦より出る殼の文蛤云々肉は二魂の石より土佐の自性昔弘法

大師此浦にあり漁夫よく蛤を乞求めり漁夫體貧の故なり云々此の合するのふれんとも云々石文蛤は四國海に於ける多し

白牛山千手院國分寺 国分打あり平地より南面なり天場八十丈の孔所なり

本尊 千手千眼觀世音菩薩 之像長一丈六尺弘法大師作 本堂南向御年六月十七日雨日開扉あり

藥師堂 本堂の左の傍あり西面あり 大師堂 藥師堂の左の傍あり 弘法大師と安ん南面

毘沙門堂 大師堂の前あり多門天王と安ん 鐘樓 毘沙門堂の傍あり 古塔なり

茶堂撰待所 東西ニテ所あり 大塔之趾 鐘樓の傍あり往古の礎石の跡あり

金堂之趾 本堂の前蓮池の辺あり 蓮池 金堂の趾と本堂の間あり 石橋と加本尺

大樹之枯木 本堂の左ニ垂れ松を伴て一余木あり一々異多のこり

二王門 金剛神の両像と安ん南の正面ニ 本坊門外の東傍あり

夫當寺ハ入皇四十五代聖武天皇の御宇天平九年詔して一國二箇の指舎を  
建之給ふ則ち行基菩薩勅命と奉つて諸及靈場とひりき給ふ所  
の二寺なり往古の佛客覺宇天正の虐亂ニ燒亡し今其礎石若干

金五ノ卅八

なり二王門の前ニ唐池あり園の池に蓮亭とて清く立青遠く

愛とて酒君より觀音の永法を元を給ふ所なり

天正年間長曾我部元親四國を押領し時佛客僧舎靈像秘書と撰

て尺懸く燒却せり如何にせり觀音堂と鐘樓と燒じて諸人

が思ひ未緒とて拜しれ蓮華座のこを觀音に給ふ尺諸人天正のこ此

人像と人の盜と取とせり若男力の人あり夜中ニ負りり又いふ像此

此國とて給ひしは世に世に給ひし中へんと洵けり人とも

推ふ昔より堂前ニ蓮池あり其像の中ニ毎夜光物あり衆人思を怪し

池中ニ其正体見え届んやとて二人水練の達者あり心も割のこり

我池中の怪と物とて人雨んとも水底ニ降りて千手大悲の尊像なり

有冠く思ひ南無大悲觀世音と唱へり米も軽く水上ニ浮き上りて給ふ





蓮池  
今朝  
出次  
露菊女  
杜亮

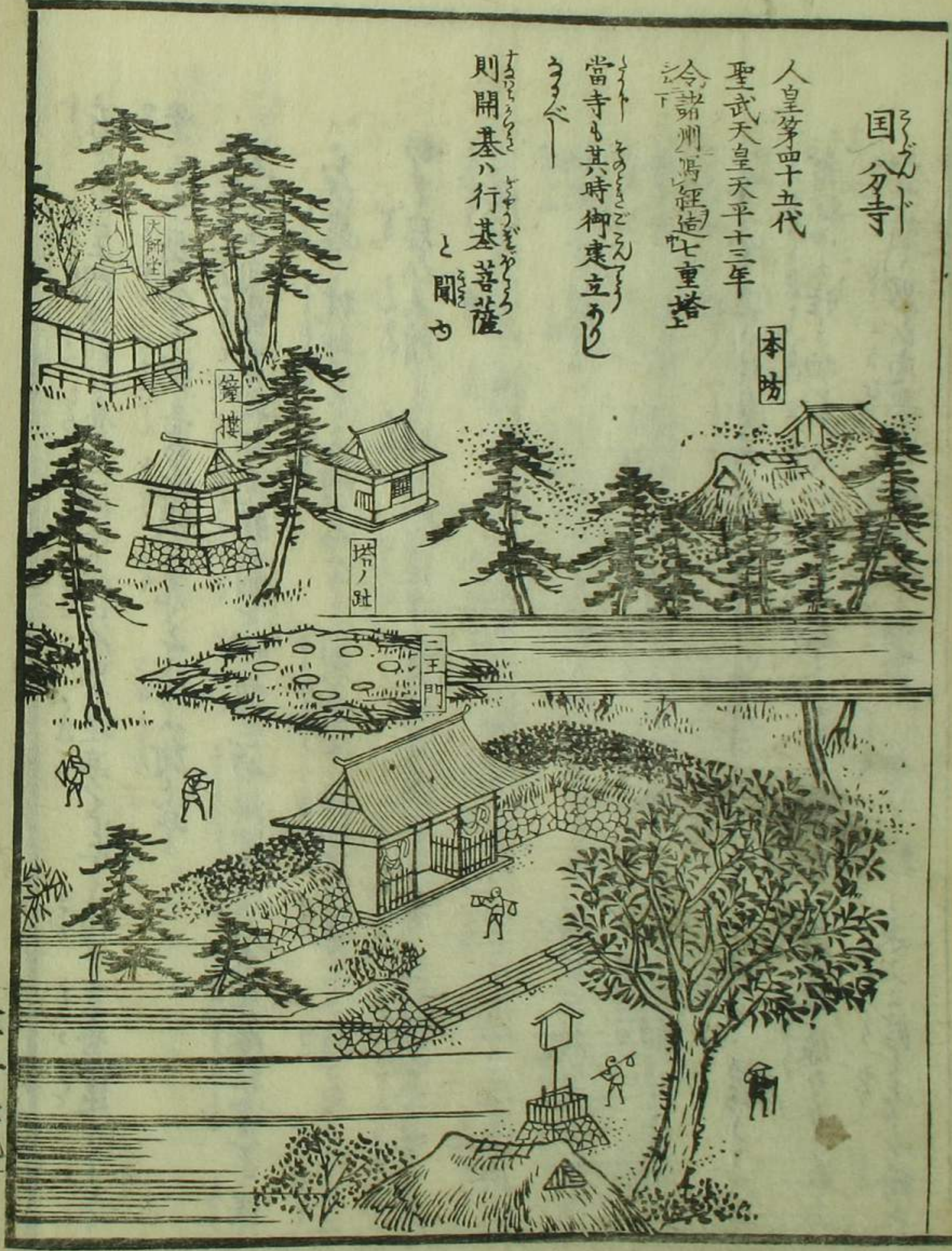
国分寺

人皇第四十五代  
聖武天皇天平十三年

今諸州馬經造七重塔

當寺も其時御建立あり

則開基ハ行基菩薩  
と聞ユ



金五ノ元九

其時諸人歡喜、寶号を唱へ奉り、各々池中に入り、俱に引上本堂に安置し奉る。今も以奉靈驗、掲音、諸願成就せむと言ふこと、一抑音、縁れ池中、乱と違給ふ事、如何なる善巧方便と、人事と知り、かゝる事、實支那中、國守伽藍、再興し給ひ、本尊の大縁、此の轆轤、壇上二卷上にてまつり、時、奉行役人、番匠僧俗、老若數百人、堂上、並居り、如何い、まゝ、大に引上奉る、網をひく、本尊、忽ち倒れ給ふ、徑に諸人、逃りぬ、其倒る、聲雷の如く、堂中、暗夜、如く、一音唱へ、則ち尊像、打とぬ、諸人、佛天、根、尊像、推けぬ、大工、殺され、と、馳せ、尊像、も、も、給ひ、彼者、一毛、も、損ず、ん、忙然、合掌、有、南

無大悲觀世音と唱へ、堂内の老若男女、不思議のおもひ、俱に涙と、異口同音、宝号と、其夜、諸人、通夜、念に、た、り、近と、事々、其座、あり、人、今、存命、濟り、傳へ、り、堂前、火、枯木、古老、相傳、觀音と、作、な、り、除、の本、若、病、人、深く、觀音と、念、奉、此、本、割、腹、用、れ、病、痊、四、國、遍、禮、の、人、普、知、り、事、又、國、寺、の、鐘、龍、宮、供、養、で、鐘、なり、言、傳、頃、奉、も、貝、売、の、者、あ、じ、と、瘡、病、の、觀、音、と、念、奉、此、貝、売、と、取、扱、れ、病、は、ら、愈、今、皆、取、其、跡、の、り、慶、長、年、中、大、守、生、駒、正、公、の、時、此、鐘、能、唱、高、松、の、城、下、取、行、六、時、の、鐘、と、る、城、下、の、怪、異、疫、癘、流行、止、時、た、れ、此、鐘、の、崇、々、と、忽、本、寺、大、守、と、姑、僧、侶、男、女

象頭山の冥驗  
小太郎父の  
誓と後



もに團分寺の諸を懺悔す。城下漸く穢り瘴癘も止る。此境と寺  
小送るも時観音往來し給ひ。種と荷ふ人と催促し給ふと諸人の  
心もさる。以上観音冥應集出

當寺より白峯さふり。幸五十町坂あり是と團分坂と山徑至つ。現本  
り俗に團分の裏坂と号し暑中、遍路の者も往たり

團分八幡宮 團分寺より十丁殊東山の坪より村中の生土神の社頭の番の後篇に出  
傳之實元永元年當團の侍士民谷源八堀源右左衛門末遺恨より、當社此  
馬湯先おたけく又傷おたけい民谷ふ運中、堀をたけ封る其妻二子小太郎と  
敬と新と象頭山、竹葉とある。靈驗、空か、い、小を良切より、武術と好  
く抑生流の與縁と、同十七年の春元年父の封と、湯石の傍に、首  
尾より、敬と封と、一、時、小太郎幸十七、其子、煉、凡、編、神、カ、擁

護の靈驗なりき故に世俗これと金毘羅御利益の後世言と稱しあす  
人口増多せり  
吉水茶堂 是井村あり不動庵とあり白峯より根香寺といふ半途あり

遍禮八十一番の礼所白峯寺より八十二番根香寺より八十三番根香寺より八十四番根香寺より八十五番根香寺より八十六番根香寺より八十七番根香寺より八十八番根香寺より八十九番根香寺より九十番根香寺より九十一番根香寺より九十二番根香寺より九十三番根香寺より九十四番根香寺より九十五番根香寺より九十六番根香寺より九十七番根香寺より九十八番根香寺より九十九番根香寺より百番根香寺  
都々山経より南に阿野郡新居村あり余の家ありこれ足弱の遍禮  
の輩より茶堂と建てる行人を助ける一箇の草屋とて往暮し徒と宿ら  
しむ 安しハ茶堂の前其来由と板に記せり

不動堂 本堂より並ぶ立像凡一丈餘の加持水 不動堂の前あり  
足尾明神社 不動堂の右の傍の山上あり往暮の婦人足の病と救を給ふを鳥居り  
竹鞋とつけ祈る者ハ勿論仕建なる旅人も道中の労とるを祈り  
る俱に草鞋をかきとて鳥居より祈るを祈り

青峰山千平院根香寺 白峯より五十町山つとあり八十二番の靈場なり本堂南面

本尊 千手觀世音菩薩 立像長三尺八寸 弘法大師作

不動堂 本堂の右隣に不動明王と安と大師堂 本堂の左の傍あり 弘法大師と安と

本坊 境内西の傍あり 茶堂 石階の半途あり 二王門 本堂の正面南に向ふ 金剛神の兩像と安と

二王門額青峯山 吳趙程赤城筆 時年七十有六アリ

當寺ハ往昔弘法大師の草創なり千手觀音の像を作り堂と建て安置  
給ふ其後智證大師より遊息し給ふ時より原此山の枯木あり其根香氣  
りり遠く薫り漢流と入り川水香りり甚し故に香川と号遂に郡  
名と香川郡と智證大師此木を以て千手大悲の像を作ると九十餘なり  
其一ハ當寺に安と其餘ハ白峯吉水等に安たり則此枯木の根の香り故に  
寺と根香寺と号と後世俗に根香寺といふ然る天正年間火災ありて本

根香寺



南海治乱記曰  
 天正十三年五月  
 廿日香西の城と  
 去て西長尾の城  
 趣くした勝賀山の  
 城に在つて香西家  
 敷世の澄文  
 家室ホ根香寺  
 の佛殿に入る  
 去る盜賊

金五ノ四十三



寺内のものと  
 取んととれ  
 鎖と下  
 明を住僧も  
 強盗の難と  
 と下  
 山中より盗  
 賊佛殿に火を放  
 つて去る此時香西  
 家の澄文  
 本尊諸佛什物ホ  
 焼亡と世静つて後寺と  
 取立んととる本尊は是なり  
 南より半路より古寺は是も弘法大師の  
 開地ふり吉野の山と像より無住といひ佛像  
 残は是と根香寺より本尊と  
 今の観音ハ素吉水寺の観音なり

尊およし諸佛像經卷什物悉く焼失を其後再興よむよの時本尊より  
 時上當寺と白峯の間吉水寺と云ふ弘法大師建立の廢寺なり此本尊ハ  
 往昔智證大師の作アリ十牀の中なれば前像同佛なるを以てこれと  
 安置し尚吉水寺の靈佛靈室ホとも藏り漸旧觀之復と然るふ又享保  
 年間火災より再々靈室焼亡は之り本堂の傍より東と眺む高松の  
 鎮城より女木島男木島小豆島ホ之渡り絶景なり  
 香西浦 根香寺より一里許東より浦里在家建つて賑り東の端川あり  
 本津川より山川より其幅廣く板橋と架と  
 郷東川 香西香東の境川なり是より東と香川東の郡なる更香東より金香東川に  
 香西より廿丁を東より  
 絃打山 郷東川の東西濱村の向う聳ゆる俗郷東山と云ふ  
 絃歩の山より出づ月影は張ると言へり  
 梓るるてふ今日と云くは絃打山霞なるあじり  
 細川道欽

遊絲ノ濱

西濱村より三丁并東北より今糸の濱より傳ふ此地ハ平生よりゆかりなり  
 故に乎るを遊糸ハ春の陽炎より晴る空の雲井の根ハゆるゆると  
 陽炎野馬松糸くびくふかどきりされれば詩も天外の遊絲なりハ有  
 とややん無とやせんといひ遊絲潦乱より碧羅の天をとりまき古哥や春に  
 空より又古名琴の濱といひ遊糸の事つとて是非と云ふ  
 又此濱遠く控況の社あり風集より  
 重仁親王之古墳 高松の城下の西官服村匠王山乘王寺の境内あり  
 今廢し之形より石と小祠と納む又此前ハ塔の形あり石あり諸人頭痛此神  
 と補し頭痛ハ腦の時蒙心なりハ纏の形なり此石ハ神を如く結びて法之  
 平愈せん事と祈りてハ靈験あり合被せたりハ是より  
 諸人平生向祈り傳ふ重仁親王ハ崇徳院第一の官なるが御父帝御謀叛に依り  
 此國に左遷し給ふ然る其御孫と慕ひ給ひ此國に下らせ給ふ平生世の愛と  
 おひつげ給ひ頭痛ハ腦に給ひ給ふ後終不蒙りて給ふゆへに頭痛なるや  
 る者ハ助け給ふとの法誓言なりと云ふ  
 王代一覽ハ新院ハ出家し給ひて  
 續岐の國ハ流し奉る重仁親王も出家する去

又當寺本尊ハ藥師瑠璃光如來ナリ弘法大師の作也

警田ノ莊之古城 高松の城下より南西に西に約一里半あり今坂田と云

建武年間細川郷律師定禪ニ楯籠る院間香西ニ屬ス故ニ高松

三郎合戦ニ敗レ去リ依リ追々味方ニ屬ス其勢已ニ三千

余騎ニ少シ近キ日京都ニ攻ムラン勢ハ高松三郎早馬ニ

系劫入道ニ夏大平紀ニ入ル

金毘羅系諸名所圖會卷之五終

